



西トップ遺跡南祠堂の解体・修復

西トップ遺跡の調査修復事業では、昨年度から 2015 年度の 5 年間の予定で解体修復事業を開始した。2011 年度には様々な準備作業と、向こう 5 年間の覚書を調印して、2012 年 3 月から南祠堂の解体に着手した。写真では南祠堂躯体部の下半を解体している。(株) タダノより寄贈を受けたクレーンを用い、一石ずつ石をつり上げて、写真手前に新設した仮組場へ移動している。本文 8 頁参照 (撮影：杉山 洋)

京都岡崎の文化的景観 (琵琶湖疏水と岡崎公園)

東山山麓の岡崎は、平安時代末期に六勝寺の巨大寺院群が造営された地域である。六勝寺廃絶後、畑地となった岡崎であるが、明治 23 年 (1890) に誕生した琵琶湖疏水を利用して、舟運、水車、水力発電による工業地帯の形成、博覧会開催と岡崎公園整備、疏水園池庭園からなる別荘地開発など、京都の近代化を支える都市へと変貌を遂げた。昭和 30 年代以降、疏水の直接利用は減少し、眺めの対象となるものの、潤いある水辺の風景は文教・観光地区である今日の岡崎を演出する。本文 20 頁参照 (撮影：杉本和樹)





絹本著色 大乗院四季真景図

大乗院庭園を西上空より俯瞰する構図。画面の中に四季が混在するのが特徴。幕末の門跡隆温が原在照の描いた原本を写した作と考えられる。復元整備された名勝旧大乗院庭園は明治の大乗院廃絶後に荒廃するが、その在りし日の姿がうかがえる貴重な作品。最近市の中に見いだされ、奈文研の所蔵となった。今後の活用が期待される。

本文 58 頁参照 (撮影：杉本和樹・鎌倉 綾)

ベトナム・カイベール集落の調査

カイベール集落はベトナム南部、メコンデルタに位置し、水上マーケットで知られる地域である。集落は河川・運河沿いに展開し、果樹園(元水田)の広がる広大な敷地に、主屋(祠堂)と副屋(炊事棟)が軒を接して建つ。ベトナム北部に比べると、緑豊かで開放的な敷地・家構えである。

本文 32 頁参照 (撮影：栗山雅夫)





藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 169 次調査）

朝庭の礎敷広場と、その下層で先行朱雀大路東側溝、区画堀、運河、掘立柱建物群などを検出した。藤原宮朝堂院の下層で造営期の遺構がまとめて確認されたのはこれが初めて。上方は大極殿、その遠方は耳成山。南東から。本文 84 頁参照（撮影：栗山雅夫）

藤原宮東面中門・東面大垣の調査（飛鳥藤原第 168-2 次調査）

藤原宮東辺のほぼ中央で、宮城十二門のひとつ東面中門（建部門）の南端 1 間分と、これに取り付く東面大垣を検出した。写真手前から奥に向けて並ぶ大垣柱穴の先に、東面中門の礎石据付穴 6 基が並ぶ。南から。本文 98 頁参照（撮影：栗山雅夫）



図版 4



水落遺跡の調査（飛鳥藤原第165次（西区））

斉明朝の漏刻台とされる基壇建物の北西側を発掘した。漏刻台の四方は掘立柱建物で囲まれるが、その北西隅部分は柱穴に礎盤石を設置していたことを確認した。北西から。本文134頁参照（撮影：栗山雅夫）

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第172次）

7世紀末に整備された中心伽藍の南側で、大型柱穴2基とそれぞれに直径70cm前後の柱根を確認した。於美阿志神社石塔婆（重要文化財：平安後期頃）の中軸線が柱穴の間を通る。東側の大型柱穴を南東から。本文151頁参照（撮影：栗山雅夫）





キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第 170 次調査）

上写真：床面の棺台痕跡。南から。

床面精査の結果、床面周囲に幅約 20cm で残存良好な漆喰が存在し、その内側に他より白色を呈す漆喰が幅 3 cm ほどの帯状に残る状況が確認できた。この帯状の漆喰は矩形をなすと考えられ、棺台の痕跡と推測できる。また、石室内各所に、石材加工にともなう朱線を 60 ヶ所以上で確認した。

本文 146 頁参照（撮影：栗山雅夫）



右写真：南端の天井石東南部に残る朱線。下から見上げる。右が南。



左京三条三坊一・二坪の調査

(平城第 478 次)

朱雀門の南東に位置し、朱雀大路に面する区画の調査。一坪と二坪の間を通る三条条間北小路や、一坪を南北二分する坪内道路のほか、六角形の 2 段組の巨大な井戸などを検出した。南東から。 本文 190 頁参照 (撮影：栗山雅夫)



井戸 SE9650 断割調査

第 478 次調査で見つかった井戸は、第 486 次調査において井戸枠を解体して取上げた。下段の西半分を断割り、土層を確認した。 本文 190 頁参照 (撮影：中村一郎)

井戸 SE9650 から出土した土器

井戸 SE9650 から出土した土器。完形品の須恵器壺類と土師器甕が多い。 本文 190 頁参照 (撮影：中村一郎)





左京三条三坊一坪の調査（平城第 486 次）

手前に第 478 次調査で検出した井戸が見える。朱雀門に近い部分には奈良時代前半の鉄鍛冶工房が広がっていた。調査区南半は遺構が稀薄であることも確認した。南東から。本文 190 頁参照（撮影：井上直夫）

工房 SX9690 出土遺物

工房からは大量に金床石、鞆羽口、鉄滓が出土した。
本文 190 頁参照（撮影：中村一郎）



鍛冶工房 SX9690 の炉跡

炉、金床石、鞆を据える鞆座が二列に並ぶことを確認した。炉は作り直すため、重複する。

本文 190 頁参照（撮影：中村一郎）



図版 8



東院地区の調査（平城第481次）

東院地区西北部の調査。西辺は谷筋を埋めるように褐色土による整地がなされた上に、東にゆくと橙褐色のしっかりとした地山の上に多数の掘立柱建物・塀、溝などが営まれた。区画施設の改変をとまなう遺構の変遷は少なくとも6時期に区分できる。南東から。

本文 160 頁参照（撮影：井上直夫）

興福寺北円堂院の調査（平城第483次）

北円堂を囲う単廊の回廊と南に開く南門の調査。造営当初とみられる回廊柱礎石痕跡や、平安時代の再建時の回廊基壇外装地覆石を確認し、北円堂院回廊の規模を確定した。南東から。

本文 178 頁参照（撮影：栗山雅夫）

